



白門板橋

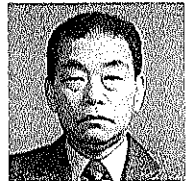
2000. 3. 15 VOL.13

編集 中央大学学員会 東京板橋区支部
発行 〒175-0082 板橋区高島平2-23-3-101 TEL 03-3975-3300



■「新春の集い」あいさつ—— 板橋区支部をよき親交の場に

支部長 小日向 孝介



皆様、明けましておめでとうございます。お健やかに、新しい年をお迎えのことと存じます。(～中略)

母校中大の動向から回顧しますと、昨年母校が取得した市ヶ谷キャンパスが、この春に開校すると聞いております。一部都心への回帰により、大学院の充実や国家試験の合格者の増加を期待したいところであり、また、八王子キャンパスについては、今月初めモノレール駅が開業し、通学・通勤の不便が大幅解消され、まことに喜ばしいかぎりです。

正月恒例の大学箱根駅伝で、母校が三位入賞を果たしました。全国各地からの声援によく応え、実力を発揮してくれたもので健闘を称えたいと思います。

ここで、板橋区支部の近況に触れてみたいと思います。

板橋区は人口およそ五十万人を擁し、行政の最高責任者として石塚区長を頂点に、助役、区議等学員が区民の生活と福祉を守るため、日夜努力をしていることはご存じのとおりでございます。当地区には、約三〇〇名の学員が在任していると聞いております。今回、担当署及び関係者各位のご尽力が功を奏し、新入会員を含め会員数三〇〇名を超える規模に成長しました。引き続き増員運動を展開して参りたいと思います。新会員の皆様も政財界や官界、そして各団体等でご活躍の会員が多数おられますので、どうぞ板橋区支部をよき親交の場として、また情報交換の接点としてご活用下さい。

本年は役員改選が予定されておりますので、引き続き温かいご声援とご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

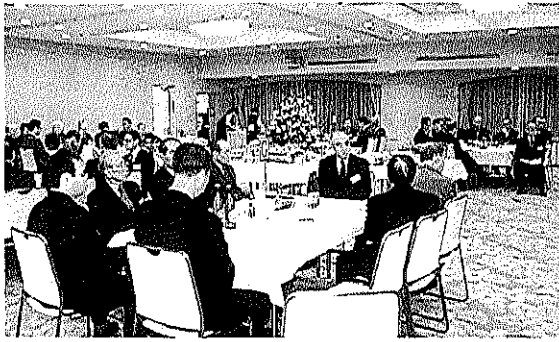
皆様のご健勝と支部の発展を祈念して、ご挨拶と致します。

●支部ニュース
新入会員歓迎をかねた

「新春の集い」に七十九名が集う

平成十二年「新春の集い」が、去る一月二十二日(土)午後六時から、区立文化会館の大会議室で開かれました。

今年には新入会員の歓迎を兼ねて総員七十九名が集い、定時総会を上回る盛会でした。



支部長の挨拶に聞き入る会員

会場に恵まれたため、全員の記念写真を一度に取り終えてから、小日向支部長の挨拶をいただき、

われわれを取り巻く経済環境、母校の動向に、支部一年の事業活動を振り返り、締め括られました。

賑やかな宴

ブロック別に配置したテーブルを囲んで、関常任幹事の発声で、

全員が元気に乾杯。

出席した新入会員の紹介では、壇上のマイクに立つ新入会員に、所属ブロックのテーブルから大きな声援が飛び、例年にない賑いを見せました。

途中から駆けつけた石塚顧問(区長)の挨拶をはさみ、宴半ばからカラオケを交えた懇親会は、この日八王子キャンパス出身者による「若手会」が急遽結成されたことが壇上で披露される等、賑やかに進行了ました。開宴して二時間を過ぎ、宴たけなわになったところで全員が肩を組み、恒例となった「校歌」と「惜別の歌」を合唱して、散会しました。(松島記)

●囲碁部また入賞者を出す

支部同好会の囲碁部は、去る十二月十一日(土)に中大駿河台記念館で開かれた「白門囲碁大会」に出場し、棋力別に編成されたクラスにそれぞれエントリーして、リーグ戦方式を戦いました。入賞者は次のとおりです。(敬称略)

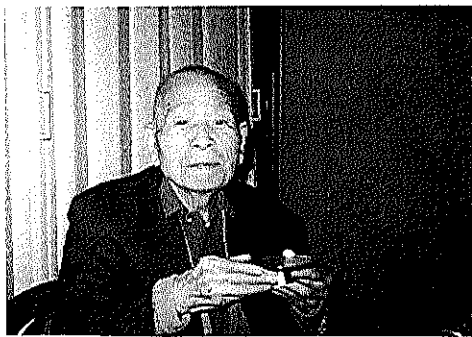
- A-2クラス 三位 高橋弘光
- C-1クラス 一位 川上喜一
- 同 クラス 三位 水野公一
- C-2クラス 一位 桜井 正
- 十回大会連続出場賞 清水治男

観桜会日程等決まる

支部恒例の行事となった春の観桜会の日程等が、次のとおり決定しましたのでお知らせします。

日時 四月一日(土)
場所 区立加賀公園

*正午までに旧中山道の板橋の袂に集合下さい。



総理大臣から贈られた金盃で晩酌する先輩

■ 園田先輩の長寿を祝う

* 支部会員の最長老・園田嘉三氏が、昨年九月の誕生日で満百歳を迎えられましたので、支部からお祝の品をお贈りしました。

参加費 四、〇〇〇円
担当 板橋ブロック
世話役 岩沢、益田、中三川
申込み 三月二十日(月)
同封の「申込み書」で、三宅宛郵便又はFAX。
(注) 雨天の場合は、板橋区民センター第一ホールで会食。

■母校のニュース■

中央大学理事長に阿部三郎氏
学長には鈴木康司氏が就任

□□□□ ■
箱根駅伝で健闘 三位入賞

ト 報

での三位入賞は、大いに賞賛される成績といえよう。
来年への期待がいっそう膨らんだ今年の大会だった。(池田記)

定時総会の日程決まる

板橋区支部の定時総会の日程等が、去る二月十三日(水)に開催された正副支部長等関係役員会で、次のとおり決定しました。

記

日時 六月二十四日(土)
午後三時から

会場 区立文化会館大会議室

予定議題

- 一、十一年度事業報告並びに決算報告承認の件
- 二、十二年度事業計画案並びに予算案承認の件
- 三、支部規約一部改正の件
- 四、役員改選の件
- 五、その他

講演

総会に先立ち、母校・中大から講師を招いて講演を行なう。
演題・講師は未定。

(事務局)

昨年十月に行われた自民・自由
・公明の二党連立政権樹立に伴う
内閣改造で、白門から

法務大臣 白井日出男 (36経)
運輸大臣 二階 俊博 (36法)
建設大臣 中山 正暉 (30法)
総務庁長官 続 訓弘 (28法)
防衛庁長官 瓦 力 (35法)

の五氏が入閣しました。活躍を
期待しましょう。
(栗原記)



往路3区の激走(村本選手)

任期満了に伴う新理事長にオウ
ム真理教管財人の阿部三郎弁護士
(昭和25年卒)が、昨年五月二十
六日付けで就任しました。

また新学長には、文学部(仏文
学専攻)の鈴木康司教授が(東大
文学部卒)が、十一月六日付けで
それぞれ就任しました。

内閣改造で
白門から五氏が入閣

正月恒例の大学箱根駅伝で、母
校が三位入賞を果たした。

戦前の予想では、四強(駒大・
順大・山学大・神大)の陰でシー
ド権争いの一角校と言われ、我々
の期待度も半ばといったところだ
ったが、箱根の山の上り下りで健
闘し、一時は首位に迫るシーンも
あった。

主力選手が次々に故障して、出
場メンバーから消えていった状況
「中国の哲学」など。

本誌『白門板橋』の題字は、

高木総長が駿河台記念館へ所用で
見えた時、当時学員会事務局長だ
った栗原三郎(支部常任幹事・編
集委員)氏が懇願し、揮毫しても
らったもの。

第九号から使用し現在に至って
いますが、書換えができなくなっ
ただけに、大切に使用したいと思
います。合掌。

芳地文学ひろい読み



「ハルビン学院と満洲国」

*

中大OBのノンフィクション作家・芳地隆之（ほうち・たかゆき）氏が、昨年三月に新潮社から表題の本を出版した。

ハルビン学院は、大正九年に元南満洲鉄道株式会社初代総裁・後藤新平の肝いりで設立されたロシア語を学ぶための専門学校で、設立当初は日露協会学校といひ、満洲国ができてから満洲国立大学ハルビン学院と名を変えている。

明治二十三年五月、上海に設立された東亜同文書院が、中国の民族・言語・文化に親しみ、日中両国の親善に参画する人材を養成する目的にならうい、

二十世紀前半の日本は、米英と並ぶ三大海軍国だったが、大陸重視の国家戦略をたて、「将来対ソ関係に携わり、満蒙の地で活躍する有為な人材を育成する」目的から日露協会学校が設立された。



ハルビン学院校舎と正門（森英正氏提供）

帝大や士官学校並みの難関を突破して「露邦留學生を命ず」という辞令を出身県庁から受け突った学生は、異国の地でどのような学生生活を送ったのか——。極寒の異国で、成人に満たない少年たちの青春の一コマを垣間見ることが出来る。

〜三学年制の日露協会学校の第一学年の週間カリキュラムは、

三十六時間のうち、半分の十八時間をロシア語（読み方、書取、文法、会話、訳読、和文露訳）にあてた。ちなみに他の授業は、国語・漢文（二時間）、経済学概論（二時間）、法律通論（二時間）商業学（総論及び売買論。三時間）（一時間）、商業数学・珠算（二時間）、簿記（二時間）、商業作文（一時間）、第一外国語（支那語、英語）独語、仏語より選択。二時間）、体操（二時間）。

進級すると、ロシア史やロシアの商業習慣に関する講義が待っており、三学年になれば、それらがロシア語によって行われる。

〜以下略

一九四五年の日本の敗戦と同時に、わずか二十五年で幕を閉じたハルビン学院だが、そこに学んだ卒業生には単に母校が亡くなったというだけでなく、青春までを奪われた悲しみがあるに違いない。それにしても、昔の学校教育は凄いのものだ。そして時代背景を差し引いても、学生がよく勉強したことに驚嘆するばかりである。

（平山記）

大相撲 一月場所
中大出身力士の星取表

出島 関 出足に つまずく

▽出島（武蔵川）

本名・出島武春 平8卒
東大関 9勝6敗

本島 出島



▽玉春日（片男波）

本名・松本良一 平6卒
東前頭8枚目 8勝7敗

▽若牧（松ヶ根）

本名・中尾洋規 平7卒
幕下東2枚目 2勝5敗

▽田中（友綱）

本名・田中康弘 平10卒
幕下西10枚目 4勝3敗

○一月場所の出島、玉春日は勝ち越したものの、OBの期待を裏切るものだった。

（池田記）

晩秋の常陸・下総路を訪ねる

リポーター
平山 惟美

十一月二十七日(土)

快晴に恵まれた東京を、石塚区長(会員)に見送られて定刻に出発。渋滞する首都高速道路を抜け江戸川を渡ると左前方に筑波山が優雅な姿を現す。三十分遅れで到着した鹿嶋でまずは腹ごしらえ。

最初の見学は、常陸国の名所・鹿嶋神宮に参拝。武甕槌大神(たけみかづちのおおかみ)という御祭神を祀る拝殿は、元和五年に徳川二代将軍・秀忠が再建。奥宮は慶長十年初代家康によって創建されたというだけに、古色蒼然とした風格のある社殿である。

その後バスの窓越しに眺めた鹿島アントラーズのサッカー球場はW杯世界大会に備えリフォームの真最中で、新旧の建造物を同時に見比べて不思議な感慨に浸った。

利根川沿いに下ったバスは、悠揚と流れる利根川に架かる銚子大橋を渡り、天下のヤマサ醤油の工場を駆け足で見学する。大豆の香ばしい香りの中で醸造工程を学んだ。西に傾きかけた晩秋の夕陽を

背に浴びながら、国木田独歩、竹久夢二の詩碑を見学して、犬吠埼灯台に隣接するホテルに初日の旅装を解いた。

夜の海に、灯りを送る灯台を浴槽のガラス越しに眺める贅沢な風呂を浴びた後、広間で宴会。魚介類と新鮮な海の幸を満喫しながら福引大会とカラオケを折り込んだ楽しい宴は、「惜別の歌」を総員肩を組んで合唱し散会した。

十一月二十八日(日)

二日目も快晴。眩しいほど蒼い

空と海を背に、悠然と天に聳える犬吠埼灯台を間近に見て、誰もが感嘆の声を挙げる。「地球が丸く見える展望台」に上った一行は、

見える展望台」に上った一行は、蒼い空と海に二度感嘆して、潮の香りを胸一杯吸い込んでから、水産物即売センターに寄り、家族への土産の買い物を楽しんだ。

復路は利根川沿いに下総国の田園風景を眺めながら佐原に下車。昼食後、手順よく伊能忠敬の旧宅と資料館を見学。六十歳から測量を始めた伊能忠敬の足跡と偉業に誰もが敬服し、感嘆した。

旅程の最後は、下総国の名所・香取神宮の参拝。朱塗りの大鳥居をくぐり抜けると、紅葉した桜の老木に囲まれて玉砂利が続ぎ、立派な楼門がある。その正面が拝殿で、奥に本殿が鎮座している。

御祭神は伊波比主命(いわひぬしのみこと)。産業指導の神・勝運の神・交通安全の神として信仰を集めるかつての官幣大社に、復路の交通安全を祈願して一路東関東自動車道をひた走った。

(この原稿は、一月二十五日発行の「中央大学学員時報」に掲載されたものを加筆して再掲します)



鹿島神宮・奥宮の前で撮す

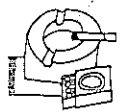
□□□□
ちよっと怖い話

不発弾の上で業務に精励



▼都営地下鉄・志村三丁目駅前のショッピングセンター
建築工事現場に、第二次大戦で米軍が投下したとみられる不発爆弾が見つかり、去る二月十一日の建国記念の休日に自衛隊の処理で不発弾が撤去された。▼施主は文化シヤッター株式会社で、大戦中は軍需工場だったことから狙われたのかも知れない。と至って冷静なコメントをする日編集長。

▼不発弾は重さ約一トンで長さ約一・八メートル。定年までの三十有余年を、この不発弾を知らずに業務に精励?した編集長ということになるが、現役の社員ともども冷汗を拭われたことだろう。
(池田記)



■なぜ「赤塚」なのか

「赤塚」の地名の由来は、松月院門前の「荒れ塚」が訛ったという説と、文字通り「赤い塚」があったという説があり、前者の方が

地名の由来 ⑤

■ 赤塚 ■ の巻

時代の初期、足利直義の所領として、その所領目録に記載されているので、約七百年前より以前であることは間違いない。

この頃は、松月院近くにある歴応の古鐘（国・重要美術品）で有名な大堂が、七伽藍と上下各六坊を配した大寺院として隆盛を誇っ



松月院の山門

としているが、この頃の赤塚地区は用水等が問題となり上赤塚、下赤塚、成増、徳丸本、徳丸脇、徳丸四ツ葉の各村に分かれたり、あるいは統合して赤塚村になったりと統合・編入が繰り返されたといわれている。

現在の赤塚一〜八丁目、赤塚新町は、昭和四十四年に上赤塚、下赤塚、四ツ葉、徳丸本、徳丸、成増の各町の一部が編成されてできたもので、この区画整理にも十年間を要したそうである。

■名物・東京大仏

最近の赤塚の名物となった東京大仏の乗蓮寺（赤塚城一の丸跡）は、地元の古刹・松月院を横目に年末・年始に大にぎわいを呈している。この寺は赤塚で三十年足らずの新参であるが、そもそもは中山道板橋宿きつての由緒ある名刹で、区役所近くの高速度道路建設の障害になるため、現在地に移転したものである。徳川八代將軍・吉宗以降、將軍家の鷹刈りの小休所あるいは膳所となった徳川家ゆかりの寺とされている。

（栗原三郎記）

編集後記



●：板橋区支部に百歳の長寿を祝った先輩がいるのに、六十代半ばで死を急いだ者も出た。東京地方の一月は、一年の中でも最も寒い季節で、雪が降るのも決まってこの時期である。梅を観て安心した訳でもないと思うが、桜はもう直に咲く。

●：母校の中大に大きな人の動きがあった。理事長と学長の交代。そして総長の急逝。年々歳々花相似たり、歳々年年人同じからず。八王子キャンパスの桜は、開花を待つばかりだ。

●：高齢化と少子化が同時に進み、板橋区支部会員の平均年齢もかなり高齢化した。若い後輩が多数入会して若返ったのは、春到来に似て喜ばしい。

（H記）

有力なようだ。

したがって、いつ頃から赤塚と呼ばれるようになったかは全く不明であるが、文献上では赤塚郷として最初に出てくるのは、南北朝

■赤塚村の歴史

松月院は一四五七年、千葉胤胤が太田道灌の力を背景に赤塚城に入り、寺領を寄進し菩提寺にした

たと伝えられており、松月院とともに寺が地域住民と共存しながら歴史を刻んで来たといえる。